

都立 第五福竜丸展示館ニュース

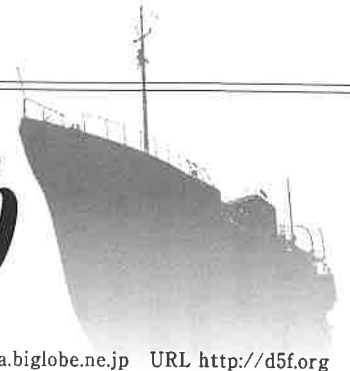
2016.01.01
No.391
(1・2月号)

福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会

連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



第五福竜丸展示館ができたことは、大きな船にこころうごかされ原水爆の被害、核の問題を実感をもって知り考える機会を創りだした。写真は第五福竜丸の母港だった焼津の小学生たち。

新たな航跡をきざむ

第五福竜丸展示館開館40年

公益財団法人第五福竜丸平和協会
代表理事 川崎昭一郎

明けましておめでとうござい
ます。

昨年十一月長崎で世界の科学
者が核兵器廃絶について話し合
う「バグウォッシュ会議」が開
催され、世界の指導者に対し、
「長崎を最後の被爆地に」とい
う被爆者の願いを受けとめ、核
保有国が核廃絶を確約すると
もに、「核の傘」に依存する国
にも安全保障政策を転換するよ
う求めています。

一月五日には、国連総会で
軍縮問題を扱う第一委員会
核軍縮を巡る多国間の交渉を前
進させるといふ決議案が採決さ
れました。決議案では、核廃絶
に向けた具体的に効果的な法的
措置などについて検討する作業
部会を、本年スイスのジュネー
ブで開催するとしています。

この作業部会を巡っては、核
の非保有国が将来の核兵器禁止
に向けた足がかりとしたいのに
対し、核の保有国側は「安全保

障の観点を無視している」など
と反発しています。

本年は第五福竜丸展示館開館
四〇周年に当たります。

ビキニ水爆実験の被害の拡が
りについて、映画「放射線を浴
びたX年後」など高知での長年
にわたるとりくみのほか、他の
県でも新たな掘り起こしの真摯
な努力が続けられています。

私たちの先輩の熱意と不屈の
尽力によって水爆被災船、第五
福竜丸の保存が実現し、誰でも
それに直接触れられる第五福竜
丸展示館という施設が現存する
意義は極めて大きいといえま
す。毎年一〇万人を超える来館
者をむかえ、展示館と繋がった
創意ある活動が全国各地でくり
広げられています。

本年も新たな気持ちで第五福
竜丸とともに核廃絶に向けての
運動を盛り上げていきたいと考
えます。

マグロ漁師・マグロ船を追う

一九五四年三月から一二月までに、核実験による放射能汚染魚を検査したのは全国一八港。「見舞い金」が配分された自治体は二五にのぼります。現在確認されているのべ約一〇〇隻のうち、三分の一が高知船籍です。高知県では高知・室戸・室戸岬が検査港でしたが、乗組員の出身地には幡多地域（土佐清水市、四万十市、宿毛市など）も多く、八〇年代の幡多高校生ゼミナール等による調査で聞き取りがすすめられました。

二〇一五年三月、初めて高知県主催で開催された「ビキニ被災船員健康相談会」が、室戸市につづき一月一日土佐清水市で開催されました。星正治さん（広島大学名誉教授）、田中公夫さん（環境科学技術研究所相談役）、鎌田七男さん（広島原爆被爆者援護事業団理事長）による説明の後、一四組一七人の個別相談がもたれました。翌日には

太平洋核被災支援センター

（以下支援センター）主催の相談会が黒潮町で開催され、第五福竜丸平和協会から安田和也事務局長と市田真理学芸員が両日参加しました。

こうした動きは、支援センターの山下正寿さん（協会専門委員）の調査活動を受けた厚労省の資料開示が発端となったものです。現在、全国各地で、被災船再調査の動きが始まっています。高知調査に参加した記録と、岩手の吉田



第五海福丸・山中武さん（左） 撮影・吉良富彦

栄一さん、鹿児島島の桑畑法文さんの調査を紹介します。

土佐の漁師に出会って

市田真理

一月一日、支援センターや地元の協力者にサポートされて、続々と相談者が入室してくると、会場は独特の雰囲気になりました。

操業中シイラを食べて、乗組員の大半が酷い下痢になったと証言する、第五豊丸のTさんは、脱毛や胃腸障害のほか、全身の熱感がいまなお続いていると訴えました。六〇〇貫を廃棄したことも記憶しているといえます。同僚のKさんは、何かがわかるなら、と漠然とした不安を抱いてきた胸中を話しました。操業中にスコールを浴び、体を洗ったという第二盛幸丸のYさんは、核実験の雲を目撃したと証言しました。

健康の不安

相談会の前日、第五海福丸元操機長・山中武さんのお宅を訪ねました。歩行が困難で、相談会会場には行けないと連

絡を受けたためです。山中さんは当時克明に日記をつけており、五四年三月には「腹の具合が悪い」「体も痛い、頭も痛い、腹も痛い」と体調不良が記されています。第五海福丸はブラボー実験から五日後の三月六日、東経一七七度北緯二四度（米指定危険区域外の南方）で操業しており、四月六日東京港での検査ではビン玉、はえ縄等の漁具から一〇〇〜二〇〇カウント、漁獲物からは最高五〇〇カウント、手袋一〇〇〇カウント、枕カバーから八三カウントが検出され、汚染が認められた漁獲物三七二五貫を廃棄しています。東京都衛生局「昭和二九年獣衛生課事業報告」には「第五福竜丸積載魚の外に汚染とは異なり食餌性汚染の疑いが判明し、水爆実験の影響が降灰による外部汚染以外に餌料生物その他まで及び、南方漁場全般に放射能魚の分布を想定せざる得なくなつた」とあります。

遺族の無念

相談会には乗組員遺族も参加しており、個別相談の後、

支援センターの集いで証言しました。第一二高知丸乗組員遺族のOさんは、夫が仕事をせずにはぶらぶらしていたこと、その姿を親戚から「極道だ」と批判され、自分も理解してあげられなかったこと、夫の生前にこのような相談会が開かれていれば、と涙ながらに語り、同席した広島県民医連会長の藤原秀文医師から、原爆被爆者の症状などについての説明を受けました。

こうした晴れることのない遺族の無念を知ると同時に、土佐清水での支援者のUさんから、「元船員たちは、自分たちはどのような状態のなかで被災したかを知る権利がある。歴史的な経緯を含め地域も専門家も丁寧に説明しなくてはならない」と指摘され、私自身が今後資料を研究していくなかでとるべき姿勢を示唆されました。

歯から被曝の事実に向ける

翌日、黒潮町での相談会では、医師面談前の予備調査を担当しました。持病の有無、船上生活で海水の使用や食

（3めんにつづく）

事、歯の状態などを聞き取りさせてもらいました。第七千代丸のYさんは乗船中カジキの内臓を食べていたと話し、現在は歯の状態は悪く心臓や肺も思っているとのこと。第五明賀丸のMさん、寿々丸のTさんも若い頃から歯が悪くなったといえます。

立ち合った星正治さんは歯のエナメル質を用いたESR線量計測により、被曝線量を推定する調査を進めており、高知県の歯科医師会でも協力を確認しています。今後被災船員から歯の提供があれば測定し、さらなる解明に役立てたいと話しています。

室戸再訪

三月につづき、再び室戸市も訪れました。映画「X年後2」にも登場する元マグロ漁船漁労長の山田勝利さんから「大丈夫という言葉は、当事者や家族は安心できる一方で、やはりたいしたことはないんじゃないか、という空気を作り、被災者に寄り添う気持ちに歯止めをかけかねない」と助言されました。地域性や住民感情なども学んでい

岩手県の被災船を探して

吉田栄一

岩手県内の被災船について事件当時の新聞や、本を手がかりに、記事に出てくる県沿岸の人を訪ねて聞きとり、官公庁なども調べました。

二〇一四年の政府公開文書なども参考にすると、岩手県では少なくとも種市・宮古・釜石・陸前高田の四漁港籍の漁船六隻が放射能マグロを廃棄しています。その他に風評被害による魚価暴落の損害を受けて延べ三七隻が減税されていきました（昭和二十九年八月岩手県鮪漁業原爆被害実態調査一覧表による）。

元乗組員は高齢で少なくなり、東日本大震災の津波で被災し当時の貴重な資料や記録を失った人もいます。四隻について調査しましたが、陸前高田市の二隻の方から聞き取った内容を紹介します。

第一二越高丸「父の人生を変えたビキニ水爆被災」

◆船主後継者の熊谷芳正さん

第二二越高丸（245トン）写真提供・熊谷芳正



（六四歳）。ビキニ事件で、第一二越高丸が放射能マグロを廃棄したと聞いた。ビキニ被災の損害が原因だと思いが、資金不足になりながら二〇代の父は会社経営に奔走したが、会社は倒産整理している。その後、海難事故で亡くなったが父の努力してきた足跡を是非残しておきたい。

第一三西丸「放射能マグロ八四〇貫を海洋廃棄」

◆元経営者・佐々木大三郎さん（八四歳）。造船所・冷蔵庫会社・マグロカツオを中心とした漁業会社を経営してきたが、オイルショックで会社を整理。ビキニ水爆実験によるマグロ廃棄の損害は大きかった。当時の記録資料は全て津波で流されて何も無い。

◆元甲板員 佐々木金弥さん（八五歳）

三六歳頃まで約一〇年乗船。ビキニにも出漁し、三崎入港時に測定され、放射能マグロは千葉県野島沖に捨てた。一回ではなかった。当時は健康診断は受けないが、船員に異常はなかった。放射能マグロを食べたかもしれないが、よく今まで何もなくきたと思う。船は更新のため沖縄へ売られ、更に台湾に売却された。

◆元航海士 佐々木司さん（八八歳） 第五福竜丸事件を当時深刻に受け止めなかった。第五福竜丸の位置より離

れて、ビキニ東側で操業していた。指定された船が当番制でその日の放射能マグロをまとめて八丈島沖に廃棄した。回数にはつきりしない。健康は異常ないが航海日誌は津波で流された。

◆元甲板員 前川吉三郎さん（九五歳） 昭和二六年頃から四〇年頃まで乗った。事件後三年程マグロの評判が落ちた。油代などを借金して出漁するので、損害が多くて返せないという倒産もあった。被災したのは漁船だけではありませんでした。貨物船でも一人の重篤な健康被害者を出した神通川丸、他に四隻が釜石に入港しています。

釜石市はビキニ事件後、原水爆禁止を決議し、昭和三四年には市民の思いが託された平和都市宣言を出しています。

—日本の核武装と外国の軍事基地化、原水爆持込みに反対し、…日本国憲法を貫く、平和と民主主義の精神に基づき、平和を愛するすべての都市と手を携えて、無謀にして悲惨な戦争を追放し、全人類（4めんにつづく）



第一三西丸（153トン）写真提供・佐々木大三郎

の福祉増進に寄与する一（抜粋）。現在、岩手県の全市町村が平和都市宣言をしており、この精神を具体的に実現していくことが求められていると感じます。

約三八〇人の岩手県出身のマグロ漁船員が生活していた神奈川県三浦市（三崎漁港）のホームページにはビキニ被災の記録が掲載され、その実相を学ぶことが出来ます。

岩手県のビキニ被災調査をこれからも続け、私たちの身近なところから核廃絶を考え、平和の大切さを伝えていきたいと思っています。

（よしだ えいいち／盛岡市在住。高校講師、調査結果をグループで学ぶ）

鹿児島県のビキニ事件

桑畑法文

厚生省管轄で国が指定した検査五港とは別に、マグロ漁の水揚げ地として全国一三港でも自治体によって放射能測定が実施されました。

鹿児島県では五月一三、一四日に台湾近海漁場から放射能汚染魚が出たとの報道を受け

て、鹿児島県水産課が主導して一六、一七日緊急対策会議を開いて検査を実施しました。県内で汚染魚の廃棄は五月二一日に鹿児島港で水揚げされた第五共進丸に始まり、串木野港では二七日の第二南進丸が最初となりました。

検査が始められた五月から打ち切られた一二月までの被害について、串木野市水産商工課編『放射能汚染魚廃棄状況』（一九五六年）によると、県内船の汚染魚廃棄に關して、魚種ではバシヨウカジキが一番多く九六六・一貫、ついでシイラ二二・一貫、キハダ一七五・三貫となつています。県内で水揚げした一二四隻のうち六二隻は串木野船籍で半数を占めています。また焼津などの県外に水揚げしたのは一九隻のうち一五隻が串木野船籍でした。

汚染魚は串木野漁業者が操業する全漁場から検出されてきました。五月は台湾東方、八重山諸島の南方にあたる海域が主で、六月は東シナ海、奄美群島の東方、八月、九月には東シナ海に加え、屋久島、種子島近海でも水揚げされま

した。ビキニ核実験が串木野を中心とする漁業者から漁場のほとんどを奪ってしまいました。また、串木野漁業者で汚染魚が検出された船は七六隻にのぼり、串木野のマグロ延縄船のほとんどすべてから検出されました。

汚染魚のため、必然的に魚価が暴落しました。「串木野市場主要漁別日別及価格状況」によると、五月二一日から三一日における水揚げ時の一〇〇匁当たりの価格がマジキでは最高値九三円が四三円に、最低価格三七円が一五円に下がりました。マグロでは最高値七五円が四五円に、最低価格二四円が九円と大きく下がりました。悲惨な状況が串木野の漁業者を苦しめたのです。

近藤康雄編『ビキニ水爆実験と日本の漁業』（一九五八年）には最も魚価が下がった五月八日から三〇日における被害の実態を、漁協が調査したものが掲載されています。【K・M氏の場合】五月三〇日に第三嘉永丸が串木野に水揚げしたがキハダマグロの一八貫の汚染が見つかり、予

定では一〇七万円を見込んでいたが、二〇〇貫をわずかず三三万二〇〇円余りで売った。翌日三一日の第五嘉永丸では汚染魚は出なかったにもかかわらず、一八〇〇貫近い魚が約三四万三〇〇円となり、船主取り分、乗組員配分も皆無であった。

【S・A氏の場合】第三祐義丸は五一八貫の漁獲に対し一八八万四〇七二円（単価一〇〇匁当たり三七円）の水揚げであった。「倒産一歩手前の窮地に追い込まれ取引商店等の買掛け代金の請求も厳

しく」と苦難を訴えている。

このように船主の経営内容、資金繰りは徹底的な打撃を受け窮地に追い込まれました。公開された外交文書には鹿児島県知事より外務大臣宛の陳情書で汚染魚廃棄と魚価の下落による被害と検査費用の補償を要求しています。また、人工放射能が雨から検出され、井戸水や農作物への影響も懸念されました。

（くわはたのりふみ・賛助会員）
*1貫=1000匁=3.75キログラム

3・1ビキニ記念のつどい 2016 太平洋核実験・被ばく船員を追って

◆2016年2月27日（土）
午後2時～4時半

◆東京スポーツ文化館
BumB 研修室 B（2階）

資料代 500円 定員 100名

報告：豊崎博光（フォト・ジャーナリスト）
山下正寿（太平洋核被災支援センター）
吉田栄一（高校講師） ほか

太平洋核実験から70年。被害や影響の全容解明をめざして、核実験被害の概要や開示された資料、証言などさらなる課題を提起、討議します

【問い合わせ】第五福竜丸平和協会

電話 03-3521-8494

世界の核被害者が集う

被ばくを断ち切るネットワークを

一月二二日からの三日間、広島で世界核被害者フォーラムが同実行委員会主催で開催されました。世界一〇カ国から核被害者や医師、研究者など一六人、国内各地から約三〇〇人が参加。第五福竜丸平和協会から安田和也事務局長と蓮沼佑助事務局長が参加しました。最終日には誰もが被ばくから逃れて生存する権利や被害補償の確立を謳った広島宣言が採択されました。

広範な被害報告

世界の核被害者たちはこれまで二度、一九八七年にニューヨーク、一九九二年にベリンで核被害者世界大会を開催し、被害を告発してきました。今回のフォーラムは福島原発事故を受け構想され、今日的な核被害を討議する場となりました。

世界各地の核被害を包括した広範な視点から核被害につ

いて議論がなされました。核サイクル被害の現場から、ウラン採掘、核実験、広島・長崎原発被害、原発事故・原発労働、劣化ウラン兵器についてそれぞれ報告があり、世界各地の核汚染の深刻さが浮き彫りになりました。また核兵器禁止へ向けた国際的な動向や核利用全般への反対のキャンペーンなど、実効的な取組みの報告もありました。

被ばくの矛盾

核による被害は常に弱者へと向かうことが各地の報告からうかがえました。ウラン採掘や核実験等による被害者の多くはその土地の先住民族であり、十分な情報を与えられないまま被害に遭っています。原発や核廃棄物処理場での被害者も経済的利益のために犠牲を強いられた住民たちです。

イラクでは、核燃料を精錬する過程で生じる副産物を用

いた劣化ウラン兵器をアメリカが使用したことによって、多くの子ども達が癌を発症しています。バスマのジャワッド・アルーアリ医師はイラク国内の四二か所の汚染地域に住む全住民が被害を受けていると報告しました。

インド東部のジャドゴダというウラン鉱山による被害を告発したフォトジャーナリストのアシッシ・ビルリさんは、会場で被害者の写真展を開催。放射能測定器を持つことも許されないという核兵器保有国インドの現状を伝え、世界の人々と問題を共有し新たな被害を阻止することが重要だと訴えました。



左からカリナ・レスターさん、アニワル・トフティさん、メアリー・ディクソンさん

核実験被害

各地の核実験被害は予期される被ばくについて住民に知らされないといい、点で共通していると感じました。オーストラリアのカリナ・レスターさんは被ばくしたアポリジニの人びとは英語を解さないといい簡単な理由で実験を知らされなかったといいます。

ウイグル出身の医師、アニワル・トフティさんも突如街を襲った放射能の砂塵について話し、中国の核実験被害を告発しました。現在難民としてイギリスに住むトフティさんは中国政府に対して行動することは難しいと話しましたが、表に出ることの少ない中国の被害についての報告は大変貴重でした。

米国からはネバダ核実験場の風下地域で被ばくしたメアリー・ディクソンさん（作家）が住民の被ばくについて報告。政府による隠蔽と被害の実態を演劇や文学により米国民に伝えた自身の活動を紹介し、文化的取り組みの重要性を強調しました。

今回、マーシャル諸島共和

国からは参加がかなわず、同国の核被害を研究する明星大学の竹峰誠一郎さんが報告、第五福竜丸平和協会からも高知県などの被災漁民の今日的課題について発言しました。また、被災した船員の歯を元に被ばく線量調査にとりくむ広島大の星正治名誉教授から報告がありました。

被ばくを断ち切るために

核被害は広島・長崎や核実験に限らず、人が核を扱うあらゆる段階で汚染が生じ、ヒバクシャが生まれます。軍事、民生にかかわらず、また核兵器の使用や原発事故がなくとも、放射能は常に放出され土地、水、大気を汚染します。

今回のフォーラムでは、世界中の核被害の全容解明と、国際的ネットワークの構築が呼びかけられました。核被害の根絶には、全ての被害者と手を繋ぐことが不可欠です。あらゆる核利用に等しく向きの合い、日本国内でも世界各地の被害に広く目を向けるとりくみが重要だと再認識させられました。

（事務局・蓮沼記）

パグウォッシュ会議に参加して

樋口敏広

本年は、広島・長崎での原爆投下から七〇年、ラッセルⅡアインシュタイン宣言が出されてから六〇年、さらにパグウォッシュ運動がノーベル平和賞を受賞してから二〇年の節目の年である。これを記念して、二月一日から五日、長崎において第六一回パグウォッシュ会議が開かれた。

私は、自身の歴史研究の一環としてパグウォッシュ運動に深い関心を寄せてきたが、初参加となった今回の会議を通じて「核なき世界」をリードする同運動の現代的意義を



再確認することができた。同時に、運動が抱えるいくつかの課題も垣間見えた。初日の本会議は、被爆者の証言を聞くことから始まった。続いて公開討論に移ったが、残念ながら講演したアメリカとロシアの核軍縮問題担当官はこれまでの軍縮の成果を強調する公式見解を繰り返すのみであった。二日目の公開討論に登壇したパキスタンの元核戦略担当官も同様であった。

原子力民生利用のリスクを議題とした三日目の公開討論では原発の是非を「核なき世界」という広い観点から検討したことは新鮮であったが、会場からは平和利用の重要性を訴える声も上がり、パグウォッシュ内部での意見の相違が浮き彫りになった。

パグウォッシュは本来、自然科学者を中心とする知識人が対立を超えて結集し、非公開で徹底的に議論する場であった。しかし、残念ながら公開討論が日程の多くを占めるようになり、また政策担当官や社会科学者の参加が多くなるにつれて、運動の中心であった自然科学者が果たす役割が不明瞭になってきている。会場からも、パグウォッシュ運動の名称の中にある「科学」の意義を問う声が上がった。パグウォッシュの本来の姿に立ち戻るためにも、今後は紛争当事者の政策担当官だけではなく政府や軍の科学者も招聘し、パグウォッシュのメンバーを交えて非公開の場で少人数で対話を進める場を拡大させる必要がある。

(ひぐち としひろ／京都大学白眉センター特定助教)
*写真はパグウォッシュ会議でのセレモニー。1995年に同会議に贈られたノーベル平和賞メダルのレプリカが広島・長崎両市に寄贈されました。これを受けて挨拶に立つ田上長崎市長。写真提供・高原孝生。



米国で被ばくの博物館建設へ

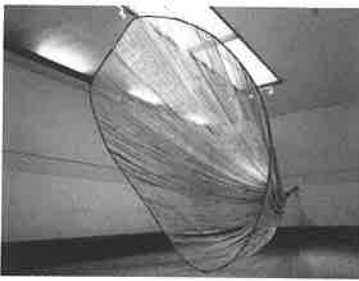
しかし、施設の風下に位置する街では甲状腺障害や癌で苦しむ人が多発。全炉が停止した現在でも地下の放射性廃液のタンクからの漏洩など深刻な汚染が続いています。こうした被害を伝えるための「博物館」を設立しようという動きがあります。農家のトム・ベイリーさん(六八)を始め各地の核被害地の代表などが共同で博物館設立を目指すNGO「CORE」を設立しました。博物館建設が実現されれば、米国の核開発による被害を訴える施設となります。

米国ワシントン州、コロニア川流域の山に囲まれた大きな土地に、長崎に投下された原爆の材料となるプルトニウムを生産したハンフォード核施設があります。一〇月にはハンフォード、オークリッジ、ロスアラモスのマンハッタン計画に関連する三施設が国立公園に指定されることが決定したと報じられました。



風下の町で子どもたちの時から被害を受けたトム・ベイリー(左)とミリー・スミスさん(一九八八年、広島で撮影・豊崎博光さん)

フォトジャーナリストの豊崎博光さんは「アメリカには三〇〇カ所以上に核兵器製造の関連施設があり、多数の労働者と施設周辺の人びとが被ばく被害をうけている。核大国アメリカは放射線被ばく者大国であるが、アメリカ人自身だけでなく世界の人びとも知りません。被ばく博物館の設立は、世界に核による被ばく被害の存在と被害の深刻さを知らしめる大きな役割を果たします」とコメントしています。



竹田作品「β崩壊」。
写真提供丸木美術館

〈承前〉
長崎県立美術館に「竹田信平アンチモノユメント展」を訪ねたのは、第五福竜丸展示館で開催中の新井卓（銀板写真）「竜の鱗」展関連企画として竹田氏を招き新井との対談（8月15日）が設定されていたこともあったのでした。

連載④

晴れた日に 雨の日に

山村茂雄

のアーチストです。竹田信平展の第1室には大きな輪の縁から引き出された無数の細い糸、メキシコ先住民が紡いだ糸を束ねた「風洞」とも見まがう「β崩壊」と名付けたインスタレーション。第2室は「α崩壊」、被爆者が話した声を変換した「声紋」を書き写したパネルが並び、スクリーンには「声紋」を刻み続ける人物が映されています。室内には被爆者の語る声なのか、観察者・観客の会話が混合したようなノイズが響いています。映像を見ながら、さながら「糸電話」のように双方向からつながる被爆者の声を聞く思いがしました。

図録に文章を寄せた文化人類学者今福竜太氏は、この「記憶の進化」のプロセス、その経過する作業営為が「原爆という災厄を次世代へと手わたす、第二の真正な目撃者となる」とも記しています。

被爆七〇年、高齢化する被爆者、被爆体験継承の問題が多様に語られています。被爆体験をどう伝えていくか、どう伝わるのか、どこまで伝えられるのか、との問いかけもなされています。今回の展示は、そのような問いかけに示唆と励ましを与えるものにしたのでした。

*

前回、福田須磨子詩碑に立ち寄って祈念式典に遅れたと記しました。福田さんは、私が「被爆」に近づく道を教えてくれただけでなく「ヒロシマ・ナガサキドキュメント1961」に熱いエールを送ってくれた被爆者でした。東松照明の撮影は福田さんが最初でした。撮影を同意してくれた被爆者のほとんどは私も初対面でしたが、福田さんとは付き合ひがあり、知り合ひの福田さんから撮影したい、そ

ういう思いがあったのです。六〇年六月一〇日、アイゼンハワー米大統領訪日打ち合わせで来日の大統領秘書官ハガチー氏の車をデモ隊が包囲、米軍ヘリで脱出するハガチー氏を、福田さんと私は一緒に目撃していたのです。

当時、福田さんはエリテマトーデス（紅斑性陰険）を発症していました。ヘリコプターの風圧にあおられ、つば広の帽子を押さえる福田さんの腕と顔のまだらにはがれた紅斑、思いが重なります。乾漆剥落の興福寺の阿修羅像、ときに憤怒、ときに民衆擁護に働く阿修羅の姿です。言葉少なに都心に戻りました。

田村俊子賞を受賞した福田さんの自伝「われなお生きてあり」に記述があります。「ついに五月一九日、新安保条約を自民党は単独で採決してしまつた。わたしは街頭に立つて「これでいいのですかみなさん！」とよびかけた気持ちは抑えかねていた。——六月一五日樺美智子死亡、六月一九日安保条約自然承認。

* 東松はライフワークと呼べるモチーフをどう選ぶかと聞かれ「カルチャーショックが引き金になる」と述べたことがあります。

痛々しい紅斑の痕、少し不自由な立ち居、撮影をためらう東松に福田さんが声をかけます。「写真を撮りに来たんでしょ、何を遠慮する」。

「長崎には、一九四五年八月九日午前一時〇二分で止まつた時と、その時を起点とする日の移ろいがある」。東松がとらえた「二つの時」その原点在福田さん撮影があつたと思えるのです。現在進行形の時を追うように長崎に足を運ぶ東松、福田さんは母に似ていると言つたことがありますが。撮影時福田さん三九歳。七四年四月二日死亡。七五年八月二日須磨子詩碑建立。

* 夕刻、東松照明と登つた風頭山に足を運びました。「ドキュメント1961」にはここから俯瞰した長崎の夜景が収録されています。

二〇一五年八月九日長崎の街にあまりが灯りはじめていました。（一部敬称略）。

開館40年、福竜丸をつつむ、たくさんの来館者、児童生徒たち



2001年に作られたボランティアの会メンバーのガイドにも熱がこもる。



展示館前のひろばには2000年1月に設置されたエンジンの展示がある。

館内2階のデッキから甲板や漁具を見る(上)。(下)展示館の閲覧コーナーで絵本や紙芝居を見る子ども達。



元乗組員・大石又七さんがよびかけ建てられた「マグロ塚」記念碑にて。



ボランティアの話に子らのまなざしは真剣だ。

斎藤明さん家族来館



12月6日午後、第五福竜丸の元甲板員で鹿児島県屋久島在住だった斎藤明(さとし)さんの兄弟姉妹など6人が来館しました。斎藤さんは2012年5月に肝臓ガンで亡くなりました(享年83歳、被災当時25歳)。一行は懐かしそうに船体を見上げ、展示パネルにある乗組員の写真などを見て、「一度、みんなで来たかった」と話されました。斎藤さんは、退院後に屋久島に戻られ、小さな漁船で近海漁をしていたと聞きました。また仲の良かつ

た大石又七さんの健康状態など尋ねていました。

焼津の中学生の作文集など寄贈

第五福竜丸の被ばく当時、焼津市内の中学校でとりくまれた作文や生活記録の活動を綴った文集など約30点が寄贈されました。これらには、福竜丸と乗組員のこと、久保山さんの死に対する漁師町の表情、生徒たちの家庭での会話などから感じたことが記され、また若い教員たちの同人誌も含まれています。文集、記録を保管していたのは、自らも新任の教師として教壇に立った飯塚利弘さん。中学生による郷土研究部が調査、編集した「焼津漁民の歴史」や「私たちの記録集—第五福竜丸事件と焼津の中学生」など貴重な資料も含まれます。いずれもガリ版刷の手作りの冊子で、わら半紙に印刷され、

劣化がすすんでおり展示公開は無理ですが、大切に保管していきたいと考えています。飯塚さんから託されたこれら資料を寄贈くださったのは、第五福竜丸平和協会の専門委員で焼津の漁業被害、漁船などの研究をすすめてこられた枝村三郎さん(静岡県藤枝市在住)です。



*お詫びと訂正

たより11月号5めんの中段、久保山忌句会船員賞受賞の名前に誤りがありました。正しくは飯田史朗さんです。お詫び申し上げます。